

PHD LETTER

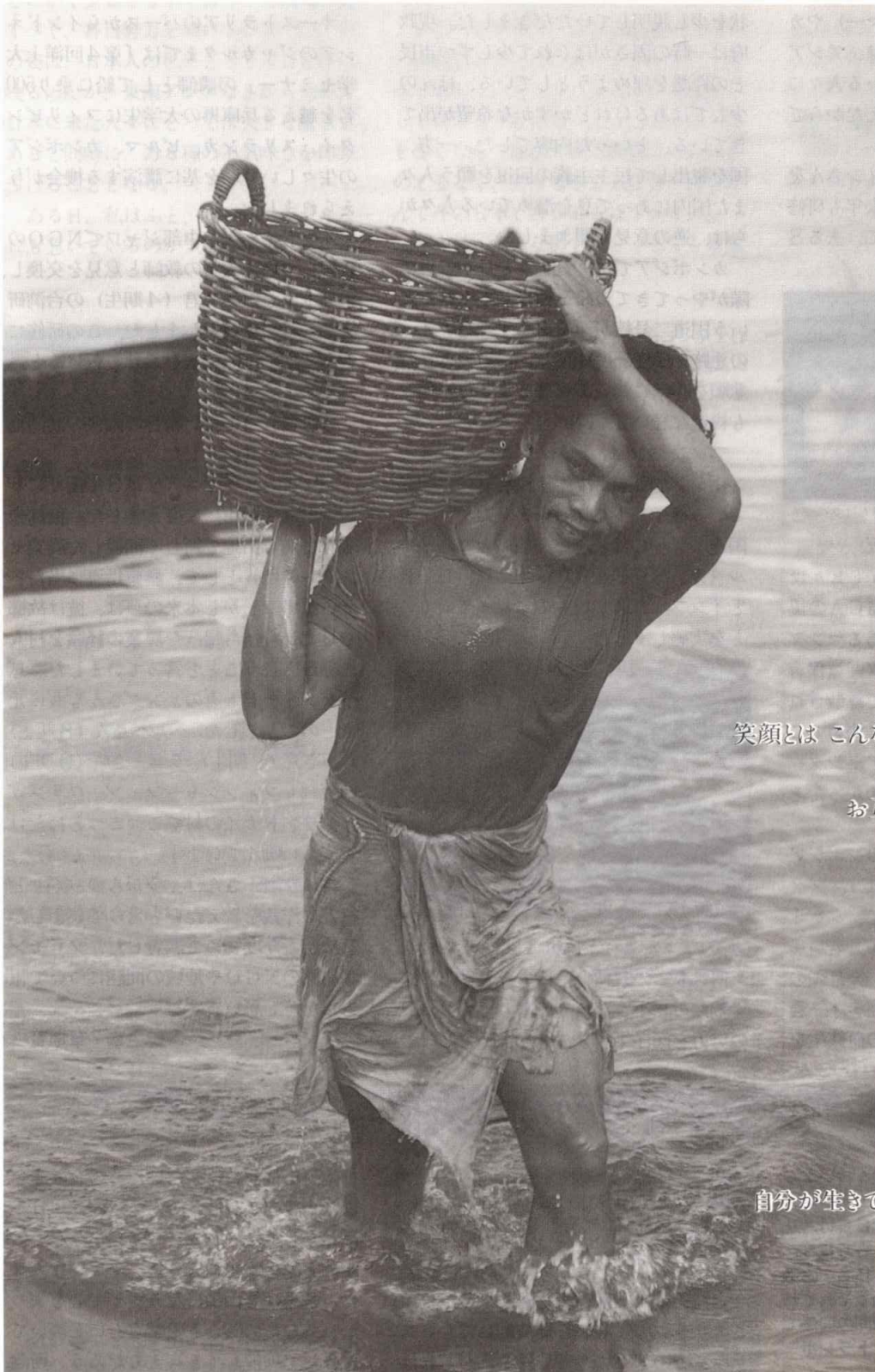
45

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1992・12

- 韓国から来ました、行きました。……………4P
- スタディツアーレポート……………2・3・6P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会
 編集人：草 地 賢 一
 住所：〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
 郵便振替：神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
 定 価：100円



道を歩く
 目が合う
 笑顔が飛び込んできて
 笑顔とは こんなに安心できるものなのかと
 胸がいっぱいになる
 お互いの心がぱっと温かくなる
 与えることで
 与えられることを
 知っている
 人と人との交わりって
 こういうものなんだ
 同じ空間を
 同じ時間を
 分かち合っている
 同じ瞬間を生きている
 自分が生きているってことを 実感できる

松浦 綾子

'92インドネシア・スマトラ
ツアー参加者、看護学生 高槻市

草の根の人々を訪ねて

PHDの研修生選びのひとつの考え方は、最も貧しい人々のところからという点にあります。過去アジア・南太平洋の諸国から招いた人々はその国で最も貧しい地域の農民（例えば東北タイ）であったり、農民よりもさらに不安定で貧しい漁民（例えばインドネシア、西スマトラ）であったりしました。

数年前からビルマ（ミャンマー）やカンボジアへの調査を始めたのは、アジア地域で最も貧しくさせられている人々にPHDの働きを進めたいと考えたからでした。

幸いビルマからは今年度ウィンさんを招くことができ、彼の村から来年も研修生を継続して招くことを願って、去る8月8日訪問しました。



ウィンさんの便りに見入る村の青年達。左の2人はウィンさんの奥さんとお兄さん。（ビルマ、マンダレー近郊のウィンさんの村にて）

緊張は昨年と同様です。しかしビルマYMCA同盟、マンダレーYMCAの協力を得て、ウィンさんの村にあるマンダレーYMCAのデイケアセンター（保育所）のスタッフと篤農家として尊敬されている農民を93年度の研修生に決めることができました。このデイケアセンターは政府の認可を得るのに6年かかったそうです。

昨年から調査を進めていたカンボジアでは、世界教会協議会（WCC）、プノンペン政府農業省の協力を得て、タケオ県パティエ郡のチョンボク村から若い農民とWCCの努力で設立され、今は国の農業改良普及所になっているパティエ農業センターの普及員と計二名の研修生を

自律のための小さな交流

選ぶことができました。

ビルマ、カンボジアいずれもアジアの中では激動の最中にある国です。それだけに出国が実現するまで安心してきません。ふたつの国の農村に希望が生まれるためにも、来年度のPHD研修をぜひ実現させたいと願っています。

ビルマでは、在ビルマ日本大使から現状を少し説明していただきました。現政府は一時の固さがほぐれて少しずつ市民との距離を埋めようとしている、ほんの少しはあるけれどかすかな希望が出てきている、といった内容でした。一方、国を脱出して民主主義の回復を願う人々、また国内にあって息を潜めている人々からは、逆の意見も聞きました。

カンボジアでは、ちょうど日本の自衛隊がやってきて道路を補修してくれるという国道二号線が通るタケオ、パティエの悪路を二度三度往復し、沿道の人々の悲願を昨年に続いて実感しました。何とも複雑な思いでした。

プノンペンは、「UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）」景気に浮かれている様子も少し味わいましたが、一方、国連のドルにほど遠い一般の人々のリエル（カンボジア通貨）の生活は、日一日とインフレで苦しいものになっていることを実感しました。



来年の研修生選考の一コマ。（カンボジア、タケオ県チョンボク村にて）

何れもこの激動の中にいる人々が自律するために小さな交流であってもPHDの努力を傾注すべきことを強く感じまし



山（ヘルベさんの村）の人と浜（ラニーさんの村）の人の地域内交流が始まった。（フィンチャーフェン、ウルオ村にて）

た。オーストラリアのパースからインドネシアのジャカルタまでは「第4回洋上大学セミナー」の講師として船に乗り500名を超える兵庫県の大学生にフィリピン、タイ、スリランカ、ビルマ、カンボジアの生々しい経験を基に講演する機会が与えられました。

インドネシア、中部ジャワでNGOの状況について大学の教師と意見を交換し、スマトラではユリ君（4期生）の台湾研修の最後の調整をしました。この研修については別項で報告をさせて戴けると思っています。

9月に入って長い旅行の最後の訪問地南太平洋を訪ねました。

パプアニューギニアでは3年振りにトニー君（7期生）に会えました。彼は去る4月から山地で新しく開設した農業センターの所長として、農業指導に当たっています。しかし本来の夢は、彼は故郷で日本から持ち帰った農業の経験を村人に分かち合うことと書いていました。息子ケンイチ君も妻のリンダさんも共に元気とのことでした。ヘルベさん（8期生）、レルさん（8期生）、ラニーさん（9期生）いずれもフィンチャーフェン、ワリングイ、ワンドカイの村でこつこつとはたけづくりに励んでいます。

特にラニーさんは、今からゆっくりと村人に洋裁を教えたいと言っていました。

次回で今度初めて調査した、ソロモン諸島国のNGOや地域の問題について報告したいと思います。

総主事・草地賢一

だからPHDの研修生に期待したい。日本の良さ悪さ、自国の良さ悪さをしかと見極めた目で、自分の持ち場で学んだことを活かしてほしい。私も金満国日本の特権を利用して海外へ行けるのだから、今回の経験を活かした活動をしたい。アジアの各地に共に歩む仲間がいることを励みにして。

恥ずかしい

鈴木直子（東京都、司書）

村の人たちとの交流に備えささやかなパフォーマンスをするために小さなタンバリンを用意していた。ある時、研修生の一人が私に、村のある人が自分の子供のためにそれを欲しがっていると言ってきた。私は1つしかないし、後また使いたいの、かわりのものをと答えた。ところが彼は、別にいいんです。自分は言われたことをただ伝えただけだからと断った。そして、何かをほしいと言ったことが恥ずかしいですとつけ加えた。私はこの一瞬、何と答えていいのかわらなくなりました。恥ずかしいという言葉があまりに率直で、こちらがうろたえてしまいました。

困っている人に、ある程度余裕のある者が何かをあげる、またはしてあげる場合、なにをどのような形であげるのか、よく考えなければいけないのだと思った。相手にただ同情するだけでなく、相手がどんな人なのかを知ることが大切なのだ。研修生の指導者の山本さんや職員の人は何度も村の人とミーティングをくり返し、一緒に海にも出ていくのを見て、まず現状を自分の目で見、知る事の大切さと大変さを感じた。議論をしたり、時には言い争いができるくらいの気心の知れた仲間になることが理解と援助につながっていくのかもしれない。「恥ずかしい」という言葉は「妥協するな」という意味だと勝手に解釈している。

かわいそう

藤田英之（神戸市、養護学校教員）

ひとつめの村、パシルバルー村で。この人は貧しくないのでは？私たちが行って、豊かさを見せて、知らないうちに欲をあまり立てている。豊かな物イコール幸せという式。今までより沢山魚が獲れ、氷で貯蔵できても、水産加工品ができて、その金で日本製のテレビや車を買う？生活は本当に良くなるのだろうか。「良くなる？今の状態は悪い？え！今の私は遅れて、不幸で、貧しくて、かわい

そうな私だとおしやるの？ここで生まれて幸せで楽しく、この暮らしが良いと思ってる？変わることが必要なの？あなたのような必要があるの？」そう問われているような気がした。何を目的とするどんなdevelopment（発展）なのか、そこを間違えないことが肝心だ。



撮影／高嶋克郎

西スマトラの鉢巻先生

山本佐一郎

（静岡県西伊豆町、漁業 研修指導者）

村に帰ったアリ君、サムスアリス君たちの要望もあり還暦を過ぎた身体に鞭打ち、2度目のスマトラ訪問にでかけた。

1回目の訪問で話したこと、伊豆で教えたことが村でどのように取り入れられているだろうか期待しながらパシルバルー村に入った。

浜にでて、網の様子を見て、いっぺんに気が抜けたというか、落胆してしまった。前のまま何の改良もしてなかったのだ。真心をもって話し合いをしたつもりなのに、よそ者の話には聞く耳をもたなかったのだろうか？村の漁師さんたちは歓迎してくれたが、私に何ができるのだろうか？しかしここまで来て、何もなくて済まされぬ、気もおさまらぬと気をとりなおした。

夜に村の人が集っての会合をもった。そこで出た村の漁業の問題点として、

1. 漁法が異なるが、ここに日本の漁法が取り入れられるか。
2. 大漁時に魚の値が下がる。買い叩かれる。どうしたら良いか。
3. 冷蔵庫もなく、氷も高く中々買えないため魚の鮮度が落ちる。その対策は？が挙げられた。

1日の水揚げは少ない時は3千ルピア（1ルピア0.06円）多ければ7万ルピアの幅、その中で生活は6~7人の家庭として10万~15万ルピア必要という。当

たればいいが、外れの時は大変と想像される。

私はこの晩は漁業組合の説明をし、協同して取り組むことの話や、漁法その他については翌朝の魚の後、詳しく説明することにした。この海ではかつおの引き縄漁法があると聞いていたので、今回は引き縄道具を少し見本に持ってきたので、その説明もした。村の人も手にとってみたが、話だけでは納得できないようだ。「先生、明日これを持って行って引いてみて下さい」という。かつおが回遊している時期に引くのなら効果も分かるが、魚のいない時に引いても釣れる筈はない。これを引けばかつお釣れると言った事をそのままに受けとって、いつでも釣れると解釈しているのか？話の仕方も難しいものだと考えさせられた。

続いて大漁時に魚が余ることの対策として水産加工の話に移り、私がかつお節を見せ、また他のメンバーからもイカ、イワシなどの加工品が出てきた。ひととおり口にしたところで、職員の藤野さんから、インドネシア流でいっぺんやってみませんか提案がでた。この実験が成功すれば、家庭で食べるだけでなく、余分に出来れば町に持って行って売る事も出来る。魚の加工とは特別にむずかしい事ではなく、このような事だと説明された。一時、女同士の話が弾む。すごく女の人たちが乗り気になっているのを感じる。さすが女の人だ。なまり節はどのようにして作るのですか？かつお節はどうやってこんなに堅く作るのですか？なぜ堅くするのですか？等の質問も飛び出す。魚の加工について興味を持ってきた証である。明日の実験が成功して少しずつでも土地の人が取り組む事になったら、今回のツアーの大きな、又、すばらしい収穫になると思う。

明日の午後3時頃集ってヤスマンさんのお家を借りて実験することで双方の女性が合意した。

魚の加工についての話が一段落したところで、最後の締めくくりとして、松江から参加の山下さんから提案があった。「皆さんのいろいろな意見や現地の状況説明を聞いていて、今私が考えているのは、皆さんが提出した問題点をしぼってこれからの研究課題とし、グループに別れて研究して欲しい。問題は4つにしぼられると思う。

1. 組合（グループ）の輪を広げるにはどうしたら良いか考える。
2. 港を造るにはどうしたら良いか考える。

スタディツアーレポート

今年の夏は3つのアジアへの旅を行いました。7月6日~16日にフィリピン、ルソン/ネグロスへ3名、7月30日~8月6日にスリランカ、ポヤワラーナ村へ10名、8月17日~27日にインドネシア、スマトラへ15名が研修生の戻った村を訪ねました。参加者それぞれからレポートが出ていますが、紙面の関係でスリランカレポートを1つ、スマトラレポートを3つ抜粋でお届けします。

他所を知り、自らの良さ悪さに気づく

相川明子（鎌倉市、主婦）

自然と精神文化がまだ豊かに残っているスリランカ、しかし経済的に貧しいスリランカの人々にとって、それがどれほどの意味をもつだろうか。町で出会った

日本へ出稼ぎに行きたいために有り金をはたいて日本語を習っている人、「日本はどうしてワーキングビザをださないのか」と詰め寄ってくる人。そういう人々に、日本は金満国になりすぎて心をつ失った、あなたの国こそ素晴らしいと説いてどうして理解してもらえらるだろう。所詮、金持ちのたわごとにしかならないだろう。

研修生レポート

日韓農民交流

今年度来日したのは忠清南道洪城郡と慶尚南道居昌郡からの総勢6人。洪城郡出身の4人は正農会に、居昌郡出身の2人は農民会に属しており、有機農業、農民運動に取り組んでいます。兵庫県内各地での日本の農業者との出会いから得たものは多かったようです。

- ホンソン 洪城郡から
- ホンソン ミョン 洪淳明 農業高校の校長先生 通訳
 - キム トシユク 金東潤 野菜中心の有機農家
 - イム ジョウソク 李東俊 朝鮮牛を飼い複合農業を営む
 - チュウ ヒョウヒョク 朱亨魯 約200羽の平飼い養鶏を営む
- コーチェン 居昌郡から
- ジンヤンソクワン 鄭双恩 白菜を主に高冷地栽培を行う
 - ヒョンスラン 卞煥榮 農民会リーダー 朝鮮牛を飼育

水上郡酪農組合(兵庫・氷上町)～渡辺省悟宅(丹南町)～中野宗嗣宅(春日町)～兵庫県中央農業技術センター(加西市)～淡路島モンキーセンター・西岡好治宅・夢ひろば・淡路農業高校(洲本市・五色町・北淡町)～神戸大学保田茂先生・信長たか子氏講義・通訳飛田雄一氏(神戸市)～在日本韓国YMCA関西交流会(大阪・東成区)～日本キリスト教団兵庫教区交流会(神戸市)／神戸市西農協本野一郎氏

研修のポイントは、日本の農業の現状と組合の活動。いくつかの生産者のお宅で見学、ホームステイをさせていただき、お互いの国の農業、農村問題について意見を交換しました。若い世代が農業から離れていくこと、食糧輸入自由化への対応など両国で共通する問題があるために、熱の入った議論となり通訳の洪先生は休む間もなし。

「国は違っても農民の考えることは同じ。農業に対する信念を共有することができた」と鄭さんの談。歴史的にも文化的にも深いつながりを持つ日本で、同志を得たことが今回の研修の成果と言えるでしょう。

ユリ君の台湾漁業研修

インドネシア、スマトラからの最初の漁業研修生ユリ・タムリン君は予定通り10月2日パダンを発って台湾高雄市で研修を受けました。10月17日までは高雄海事専門学校を中心に漁業全般(漁場環境、経済、政策、養殖、加工、大型遠洋漁船操船他)の学習をしました。



保田先生より有機農業の講義。皆、真剣です。



英語でキウ栽培のご説明。韓国ではウインさんの通訳がピカイチでした。

韓国比較研修

今年9月の約2週間、忠清南道・洪城、慶尚南道・居昌を10期生4名と職員2名で実施、後半には農業研修指導者の広岡正人さん(兵庫県・福崎町)が加わりました。ちょうど韓国は秋夕(旧盆)の時期。家族がにぎやかに集まった農家で歓待を受け、韓国の伝統行事を体験することもできました。

この韓国が初の海外出張の職員2名に引率された今回の研修旅行。韓国美人に鼻の下を伸ばす人、料理が口に合すぎて太る人など皆それぞれに個性を發揮し、ドジをふみつつも、何とか無事終えることができました。受け入れて下さった方々には本当にお世話になりました。

今年の訪問地は2カ所。最初の訪問地洪城には10日間滞在しました。この地域は畜産が盛んで、田畑が広々と広がっているのどかな風景が印象的な農村です。ここで研修生は村の信用組合や生協などの職場を見学し、農家にホームステイして実際の生活や作業を体験しました。この村にはPHDが毎年訪ねて交

流を深めているブルムー農業高校があり、同校の先生や卒業生が中心となって「正農会」という農民の団体を組織しています。有機農業や産消提携などを地道に実践しながら農業と農民のかかえる問題に積極的に取り組んでいる農民達の姿に学ぶ所が多くありました。

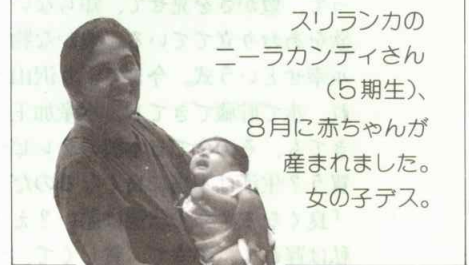
次いで、漁民センターをベースに高雄及び近郊の漁村、漁民を訪ねながら、自治体レベルで進められる大型漁業開発とその影響がどのように地域に及んでいるかを実践的に研究しました。

この第二次研修の成果が、今後西スマトラにおいて展開されるであろう州政府レベルの漁業開発の方針決定に活かされることを期待しています。

今年9月の約2週間、忠清南道・洪城、慶尚南道・居昌を10期生4名と職員2名で実施、後半には農業研修指導者の広岡正人さん(兵庫県・福崎町)が加わりました。ちょうど韓国は秋夕(旧盆)の時期。家族がにぎやかに集まった農家で歓待を受け、韓国の伝統行事を体験することもできました。

この韓国が初の海外出張の職員2名に引率された今回の研修旅行。韓国美人に鼻の下を伸ばす人、料理が口に合すぎて太る人など皆それぞれに個性を發揮し、ドジをふみつつも、何とか無事終えることができました。受け入れて下さった方々には本当にお世話になりました。

〈帰国研修生短信〉



スリランカのニールカントイさん(5期生)、8月に赤ちゃんが産まれました。女の子です。

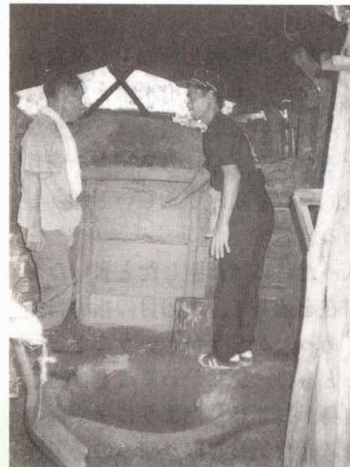
10期生研修レポート

韓国の比較研修を元気一杯にこなし、多くの出会いからより広い視野を得た研修生。日本語もほとんど理解できるようになり、これからは講義形式の研修も取り混ぜこれまでの成果を体系的に整理していきます。村に帰ってからの生活改善の実践を考えると学んだ事柄をどう伝えていくかが次の課題です。もうひと踏ん張り、ファイト。

ティン・アン・ウインさん

(ビルマ)

中野宗嗣宅(兵庫・春日町)～橋本慎司宅(市島町)～渋谷富喜男宅(神戸市)



炭焼き技術を学ぶウインさん。これは使えそうだと。

これまで多くの方々と出会う中で、村の生活改善、農業のあり方などいろいろ考えてきたウインさん。やはり、機械化された日本の農業の表面を見ているだけでは得られるものではないと思ったようです。ビルマの現状を考えれば当然のこととも言えるでしょう。

そのためか、ウインさんは様々なことを経験し、その中から取捨選択しています。また、研修先の方々と会話にも農業のことだけでなく「どう生きるか」といった哲学的なところまで話は及んでいます。

ある研修先では、酒を酌み交わしながら工業化、近代化された「金持ち日本」に住む人々の精神的貧しさを鋭く指摘したり、反対に工業化の中で農業がないがしろにされながらも「土に生きる」人も大勢いることを聞き、同じ「百姓」として共感するなど、国籍、民族を超えた交わりを体験しています。

技術研修のみならず、アジアと日本の心の交流を目指すPHD運動をウインさんは実践していると言えるでしょう。

シャーンタさん

(スリランカ)

田中五郎宅(兵庫・波賀町)～笹間政典宅(鳥取・日野町)～和歌山県海友会／山崎佳彦宅(有田市)



倒れてしまった稲を全部刈り取りました。お疲れさん。

これまで養鶏を研修の主要テーマにしてきたシャーンタさんですが、今では興味・関心は広がり、村の生活改善をいろいろな角度から考え始めています。

その中で一番の関心事は協同組合です。田中さんのお宅での研修中に、農業改良普及員の方からマンツーマンの講義を受け、農協の仕組み、運営方法などを学びました。彼の村ではまだ、日本のような村のニーズに対応し得るだけの組織がなく、既に帰国したアジヤンタさん達とのグループに加わって村づくりをすすめる上でのいい勉強になりました。

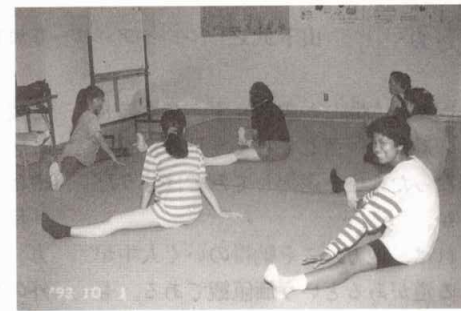
養鶏をはじめとする農業技術に関しては着々と研修成果を挙げているため、今後の研修は、組織運営に重点を置いて村の生活改善を新たな視点から考えていきます。

日本語の上達につれ、なかなかのガンコ者であることがわかってきました。一見もの静かて優しい彼ですがシンはしっかりしています。

セニフィタ(エニ)さん

(インドネシア)

赤穂中央病院(兵庫・赤穂市)～東出雲町役場(島根・東出雲町)～宍道町役場(宍道町)・黒木保健所(西ノ島町)～岡村たえ美・芝美代子宅(兵庫・三木市)



妊婦体操がんばりました。エニさん、柔かいですね。

保健所などで妊産婦の出産前後のケア、乳幼児の健康管理について研修を進めてきたエニさんですが、赤穂の病院の産婦人科で学びました。

研修初日にまずビックリ。研修先が近代的な総合病院であったために「ここはどこ?」と第一声。かなりとまどったようでした。それもそのはず、エニさんの村に日本の様に完備された病院はなく、よほどの事情でない限り

り町の病院に行くこともありません。エニさんにとっては大きな会社に見えたのかもしれませんが。

しかし、実際の研修ではいろいろな角度から妊産婦のケアについて学ぶことができました。乳房マッサージ、妊婦体操など近代的設備を必要としないところの研修に重きが置かれました。また4回も出産に立ち合うことができ、看護婦さんの対応の様子を写真に収めるなど成果がありました。

エニさんが看護婦さんに「この機械がなかったらどうするの?」と質問した時、その看護婦さんが返答に困ったことがあったとのこと。振り返ってみるとほとんど機械で済ませてしまう今日の日本の生活環境は、何かか欠けた時のことを思うと怖く感じます。

ハスマヤニ(ヤニ)さん

(インドネシア)

五色町健康福祉総合センター(兵庫・五色町)～西尾市郎氏、日本キリスト教保育所同盟(沖縄)



栄養士さんからお年寄の給食の説明を真剣に受けるヤニさん。

数カ所での研修を通して彼女がわかってきたことは、村に帰ってから生活改善を行う際にそのまま「できること」と「できない」ことがあるということです。

当たり前のように感じられますが、保健衛生について専門知識が十分でないところから研修を始めたヤニさんにとって、ひとつ段階が上がったといえます。

つまり、栄養衛生を管理して健康を維持する或いは創り出していくことの大切さを村の人に伝える時、あまり高度な内容、村の生活からかけ離れたものであっては保守的な村の人達はなかなか受け入れようとはしません。生活と密着した形で改善を考えていく必要があります。

エニさんと同様に研修先は村とはレベルの違う環境ですが、保健衛生と栄養の技術、知識にとどまらずその伝え方、広め方また日本の今の保健状況に至る過程の段階、その苦労などを学んでいます。

研修先でもよく質問し、研修内容についてリクエストもするなど積極的な姿勢が見えるヤニさん。あせらずゆっくりとがんばりましょう。

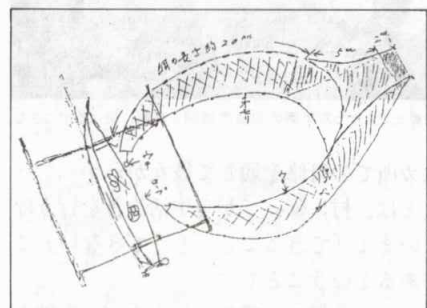
3. 網の改良や舟の改良等を考えながら漁獲量増大を考える。
 4. 魚を高く売る方法・魚の加工も含めて考える。

以上の4つの目標をたてて、それぞれのグループをつくって研究し、年に一度でもみんなが集ってそれぞれの研究成果を報告し、村民の生活向上が少しずつでも前進するようにみんなで努力したらどうでしょう」との提言であった。

勿論わたしもこの提案には大賛成であり、藤野さんから何回となく研修生のアフナル君を通じて話してもらった。あとは、彼等が本気で取り組む意欲があるかどうかにかかっている。

今夜のミーティングはここで終わる。明日早朝、わたしと藤野さんは舟に乗って漁法(操業)の実態調査をする。他の人は小学校の見学をする事を確認して終わった。午後11時…

翌朝、鉢巻姿で浜に出た。出港といっても港はなく、砂浜から舟を水ぎわまで下げて、浜辺に押し寄せる波の様子を見て一気に沖に出すのである。この浜では大型の8人乗り、長さは7m位、巾は2人並ぶことができない程狭いくるぬき舟である。幅が狭いため両舷にフロートが張りだしている。



図のような漁法だが、いかにも原始的なのに驚かされた。3回網を入れたが、多くは獲れなかった。8月の今頃は魚が一番獲れない季節だという。

理想を言えばキリがないが、ここは日本ではない。大がかりな投資を必要とすることなく村の人にできることで、何かひとつでも成果のある指導がしたい。陸にあがって、漁師さんたちと話をすることになった。舟で気づいたことを尋ねてみる。「操業している時に、網を作る時、網がロープに巻きつくことはないか」そんなことは度々あると言う。日本では網を作る時、必ず一本のロープは反対よりの物を使って巻きつかないようにしている。ここではそのことには無関心のような。左より以外のものはないと思っているのか、しかし今までどおりのままでは困る。何とかこのことだけでも理解してもらいたい、本気に取り組んでほしいと説明した。

どんな網で操業するにせよ、網なり(網が良く広がっている事)が良くなっているなければ魚は入らない。そんなことを辛抱強く説明した。後で訪ねたアイルバンギス村で右よりのロープを見つけたので、この改良はその気になれば可能に思う。

2晩目も会合をもった。操業の実情を視察したあとだけに話に熱が入る。何はともあれ網の改善を真剣に考えて欲しいと訴えた。

しかし根本的な改善となると今の舟のままでは難しい。この漁法は長いあいだかかって考え出されたものであるし、私も良い代案は浮かばない。大きな転換を図るとなれば舟を大きくし、漁法を変えなければ、となると港が必要となる。

そのためには沖合いに波よけのコンクリートブロックを積み上げて港を作ることも考えられる。自分の代で実現しなくても、この村に居続けるならば、子ども、孫のため、将来を考え、気長に取り組んで欲しい。そんな話もした。さらに浜での舟の上げ下ろしにウィンチを使ったら、それが難しければその人力版のカグラサンはどうか、さらに、舟の下にしら(木)を敷くのはどうかと助言した。また昨夜の山下さんの4つの提案もあらためて話した。会の途中からは村長さんも加わり、私の「将来の村の事を考えて、子どもや孫のためにも」の発言に共感してくれ、今回の私たちの訪問が村人との交流を深めたこと、村の将来のための指導にお礼を述べられた。

午後女の人から挑戦した加工も試食させてもらったが、上等の出来栄であった。村の女の人から本気で取り組めば、大きな変化になるだろう。今日の気持ちを忘れずに意欲的に取り組んで欲しいと願うところである。

村に入った時には落胆したと書いたが、今回の滞在を通して、1回目の指導自体が適切であったかどうかということに反省するとともに、急にかわることは難しく、私自身、村で話したように子や孫の代までを考えた気長な取り組みの必要性を改めて感じた。ゆっくりながらパシルバルー村に、アリ君、サム君を中心に漁師のグループの活動がすすんでいる。そこに期待したい。

(本文は全38頁からなるレポートの一部です。抜粋について前後関係から一部、編集部で手を入れたことをお断りします。)

山下武之(インドネシア・ツアー参加者 松江市、山下プランニング・グループ代表)

投稿 日本の地方と海外の地方が

地域の活性化の計画策定に参画していく中で、高齢化・過疎化による若者の圏外流出は、これまで以上にきびしくなっている。澄田県政も定住化のためのプログラムに積極的に取り組んでいる。若者がここ島根県に住み着くには多くの課題があり、それを一つ一つ解決していかなければならないだろう。

しかし、定住を長期的なスタンスで考えてみるなら、私見ではあるが、解決策は「若者の価値観を変えること」だと思っている。都会への人口流出が始まった昭和30年代から今日まで続いている「都会と地方の図式」を壊すことである。都会へ出かけて大企業のサラリーマンや国家公務員になって出世を期待する。ほん

の一握りの人間しか成功せず、多くの人はその過程で脱落してしまう世界。もっと異なった人生を選択してはどうだろうか。

それは、地方にこそ納得のいく人生が送れる道があるという価値観である。もちろん、そのために地方がやらなければならないことはたくさんある。しかし、そこを避けては20年経っても地方の苦しみは解消しない。いや、今よりもっと深刻になっているであろう。20年先のために、地方がやらねばならないこと、それが「価値観の変革」であり、そのための「プログラムの構築」である。

概念的に考えると「都会と地方の図式」を壊すためには、都会に替わる対象物を

必要とする。生まれてから死ぬまで地方に居続けるというのも困りものである。やはり、井の中の蛙はいけぬ。僕は「都会」に替わるものとして「海外の地方」を持ってきたい。「日本の地方と海外の地方」。この図式の中に21世紀の新しい価値観をぜひ創出したい。

島根の若者が積極的に「都会」に出かけるように、「海外の地方」に出かけ、学び、あるいは教えながら、島根を知り、日本を知り、地球を知ることである。また、アジアの青年が島根を訪れ中期的に定住し、日本の文化を知り、技術を学ぶ。そうして、お互いが学び理解しあう「場」を提供することが、県が今後行う「国際協力」であると思う。

日本をカタる。

「世界を斬る」に代わる新コラム。日本のふるまいを正すことこそ国際協力と考える筆者の物言いにご期待下さい。

以前私は街中を歩いていると、なぜか速足になった。私ばかりではない。交差点で信号が青になった時など、あたかもみんなが競歩しているような状況になる。とにかく少しでも早く自分の目的地に着くべく、各自努力を傾けているのだ。その姿は、日本人の私にとってははげげに映るのだが、東南アジアなどから初めて日本に来た人々にとっては大きな驚きであると同時に、ある種の不気味さを印象づけることとなる。

ある日、私はふと、なぜ自分がそんなにも急いでいるのかが分かった。その街

はビルが雑然と立並び、心がなごむには程遠いような所だった。実際、日本の街は一部の観光地を除いて、ゆっくり景観を楽しみながら歩こうという気になるような類のものではない。無機質な近代建築は殺伐として心がすさんでくるし、看板やネオンの洪水は神経を苛立たせる。ただ通らねばならないために街中を通るなら、なるべく早く通り過ぎてしまいたいことはない、と思わせるに十分なくらい、「不快」なのだ。

ひょっとすると、これは経済大国日本の原動力になっているかも知れない。生産効率を上げるためには人々にあくせくして頂かなければならない。のんびり街を歩くなして事は時間の無駄以外の何ものでもなく、そんな事で人件費が嵩むなんて今の日本で許されるはずがない。

さらに、そんな街ではどうしても景観

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1992年8月	66件	1,159,989円
9月	55件	11,154,699円
10月	78件	2,335,212円
	199件	14,649,900円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

〈今年も自動車総連よりご支援〉

12の労働組合連合から成る自動車総連からの多額のご支援も3年目。9月22日東京で当会森理事が出席し、92福祉カンパ特別寄贈を他3団体とともに受けました。研修旅行の道中に各労働組合を訪ねお礼とご報告をしていますが、今年は日野労連、部品労連に向う予定です。感謝です。

〈若手ボランティアに若人の賞〉

事務所の企画、行事に活躍する多くのボランティアメンバーを代表して、社会人2年目の中山瑞恵さん(神戸市)が、平成四年度兵庫県若人の賞をいただきました。優れた活動によって社会に貢献した青少年を表彰することによって「こそばゆいわ」と中山さんの弁。

〈秋の行事にひっぱりダコ〉

秋はバザーの季節ですが、今年は例年にも増して、学校の文化祭や各種催しにお声がかかり、バザー出店・パネル貸出しの担当は大

忙がし。中でも龍野市での「愛のコンテナ作戦」にはウィンさん、加古川の滞在家庭丸山さんも提言者として参加、多くのボランティアのお手伝いでバザーも盛り上がりしました。

〈特製PHDウェア〉

前号でもお知らせしていたアジアの漫画家によるイラストのトレーナー、Tシャツとともに準備OK。あなたもこれを着て文化紹介をして下さい。サイズは、M、L、LL。Tシャツは2,000円、トレーナーは3,500円で、収益は研修生支援に用いられます。

〈西日本研修旅行でお会いしましょう〉

東日本の次は西日本。西日本でPHDをご支援下さっている皆様と、お会いするのに今年も研修生と職員がお邪魔いたします。そろそろ終盤に入る研修での経験や自分の村のことなど、研修生から聞きたいこと、たくさんあると思います。訪問・交流会を希望される方、ご連絡下さい。また同行する方も募集中です。コース決定後、対象地域の皆様にご案内いたします。

時期：'93年1月下旬～2月中旬

予定コース(車で参ります)神戸～大分～筑豊～北九州～福岡～宗像～熊本～水俣～長崎～広島～岡山～神戸

訪問者：第10期研修生4名、職員

内容：研修生の話、現地のスライドを用いた交流会、研修に役立つ見学、また宿泊等をお願いします。

よりお店のウィンドウや商品の方に目が行ってしまう。自然と購買意欲がかき立てられる仕組みになっているわけだ。貿易黒字国日本にとっては内需拡大は至上命題である。通産省の役人は不快な街に感謝しなければならないかも知れない。

しかし、こんな生活は人々の心にかかるの負担をかけている。絶えず追い立てられるように行動しているわけだからイライラ状態が普通になってしまい、他人の事などかまっている余裕なんてなくなる。「現実逃避」が今どきの若者の傾向を表す典型的な言葉になっているのも至極当然な話だ。私だってもっと居ごちの良い所に脱出したいと思ってしまう。

近頃私が街中を歩くと、幾度となくかかとを踏まれるようになってしまった。

花山愚了



布がつなく 各人の思い

ワープロにかけている草木染の布のやさしい色を見る度に、心が和み、静かになっていくのを感じます。一枚の布も、人の心に語りかけるのだと知りました。華やかではありませんが、深い魅力を持った布だからこそ、私の周りにも、関心を寄せてくださる方の輪が広がりつつあるのだろう、と思います。

「草木染の布が、気に入ったので購入します」、「布を織る人たちの経済的な自立を助けることになるから協力しましょう」等々、いろいろな動機がありますが、それぞれの思いを、布がひとつひとつ伝えてくれるのです。それが、ソディのよいところではないでしょうか。ただ、お金を出すだけ、あるいは「自分はよいことをしている」という感情に満足するだけではなく、布を織る人たちや、アジアに対する関心を深めていければ、と思います。特に、布が売れることが、織り手の人たちに、どのような影響を与えているのかについては、定期的に知りたいと思います。自分にできるのは、小さなことにすぎませんが、布を通して、アジアとの関わりを今後も考え、少しずつ広がりつつある「分かち合い」の輪を大切にしていきたい、と願っています。

秋山範子(兵庫県市島町)

○月×日のPHD協会

総主事 草地 前号本欄中、パンツ一丁であるも3カ月の出張から戻っての第一声で「海水パンツにはきかえて、洗濯」との抗議。ご本人の名譽の為訂正します、と長期出張にも負けず元気に帰還。

主任主事 藤野 業務体制の改善を図る目的の同業他組織の人々との寄合いに、あいつは どうも文句がありそうとみられているのか、大阪と御殿場の会合で役があたる。業界の危険分子か。

主事補 小松 神戸の事務所ながら、自分以外は皆ヨソの出身なので、そのへたな関西弁にイラつき、その範たらんと、コテコテの大阪弁で事務所の会話をリード、研修生の日本語にも影響を及ぼす。

主事補 吉岡 スクーターの老朽化に伴い、まっさらを購入。初乗り15分で駅前に停め、戻ってみると、ナイ。盗られ、数時間後に見つかるも、部品をはがされ無残な姿。社会に憤る今日この頃。

囑託 柳下 比較研修で韓国へ。飲酒を伴う会合も軽くこなし、移動時の財布忘れにも

動じず、任務を果たす。しかし農村に多くいるヤギの所でウィンさんにイルボン（日本）ヤギとからかわれ怒る。

囑託 渡邊 職員として4カ月、仕事も徐々に慣れ、小松、吉岡、柳下、渡邊の机の中間にある一台の電話機のベルが鳴るたびの戦いではリーチを活かして優位に立つ。優しい声なら渡邊です。

今年の夏はスタディツアー以外でも、多くの若手が海外へ。田路佐和子、蜂谷知子両嬢と渡部慎君がネパール、杉本大三君タイへ、各々研修生を訪ねました。



編集後記

中国でいちばん大きな情報手段は何かというと、「小道消息」、口コミです。

もちろん、新聞や雑誌などもありますが、今のところ人のうわさがいちばん確実に効果的な方法のようです。道端や家の前では、よく井戸端会議をしている様子が見受けられます。

つまり、中国では今でも、コミュニケーションとはお互いに分かちあうというプロセスから生まれてくるのです。

笑ったり、怒ったり、喜んだり、悲しんだりする中で、お互いに対する認識が深まり、こういった人間的なコミュニケーションは、今の日本には少ない心の豊かさだと感じました。

今の私達の生活に欠けているのは、この様な「人間くさい付き合いの場」であると思います。

経済的な豊かさは社会的豊かさをも実現するはずでした。しかし、経済大国への道の中で、このような語らいの場が見失われてしまったことに、現代日本の心の貧しさがあるように思われます。

このレターがひとつの暖かいコミュニケーションに、また出会う人との話題の提供になればと思ってお届けしています。

中国帰りの大学生 ホアンサン パオズ晃三

<編集メンバー>

赤木まゆみ 荒木琢磨 柿原登志夫 田中裕美 千原創 蜂谷知子 美木朋子 山田晃三

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。